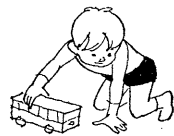


T 雄の成長 (四)

浜 田 駒 子



趣 味

b、ピアノ

小さいときから音楽は好きだった。

うたうことが好きで、よく母と妹と弟と四人で合唱する。いつも母が低音を受け持つが、母とT雄でパートをときどきかえ、「今度は僕が下を歌うから」といって合わせる。

T雄は学校で習った歌の低音をうたう。妹は知らない歌でも、三度くらいさがったところを自己流に合わせてうたってくれる。

独唱も好きだ。

ある日、音楽の時間に「線路は続くよ」をうたわせられた。数日後、自習の時間があり、他の先生がみえて、

「この間、音楽の時間に、いい声でうたっていたのは誰、先生に

きかせてよ」と、おっしゃったので、まわりの皆につつかれ、同じ歌をうたった。

次の日、担任の先生に、

「T雄はなんだ。他の先生に歌をきかせて、俺にはきかせないのか。ずるいぞ、うたってみなさい」と、給食の時間にまた、うたわせられた。この三回ですっかり人前でうたう自信がついてしまった。

音楽の先生に何か楽器をやるようすすめられた。

そのとき、父と母は趣味について話し合った。父のいうには、

「T雄には読書がある。が、読書は、趣味と同時に生きて行く上に、仕事をして行く上に、一生切り離せないものだ。本を読むことが好きだということはT雄にとって幸せなことだね。さらに、

中学生

青年期をまっすぐ伸びて行くには、スポーツと、絵か音楽のどちらか一つを趣味として持っていたほうがいいと思う。絵も音楽も毎日一定の時間の練習を重ねていくところが、青年期にふさわしい。僕は中学時代、放課後、角力をフラフラになるまでやり、家では必ず絵を描いていたので、青年期のモヤモヤを無事通り過ぎることができたと思っている。

ピアノとか絵は、小さいときだけで終わるのでなく、社会人になっても続けられ、花が咲くように、幼いときから続けて基礎をやっておくのがいい。社会人になつてから、余暇はテレビにマージャンでは情けない。構成まで行けるように、ピアノだったら作曲までいくことだ」

絵をとるか、音楽かということになり、幼稚園の頃、ピアノをやっていたし、すべての楽器の基礎になると、五年生からまたピアノをはじめた。

「毎日練習、作曲までいく」と父にいわれたが、道は遠い。放課後運動して帰ると夜になる。一度もピアノの前に坐らないうちに一週間が来てしまう。

「家で練習しないで、先生のところでおしを二度、三度として、いるうちにだんだん弾けるようになった」と苦笑している。

◇興奮

中学校は、近所の四つの小学校の卒業生が集まって一つの学校に入る。知らない友だちができるのと、同じ小学校のどの生徒といっしょのクラスになれるかが最大の関心事である。

「僕ね、誰といっしょのクラスになるか、どんな友だちがいるのか考えると、胸がキューツとなるんだよ」

入学式前日から、落ち着かなかつた。

入学式当日も、何となく興奮状態である。

中学校の入口近くで、野球部入部勧誘のピラを手渡された。

その中学生は、ただ機械的に、新入生にピラを手渡しているのに、T雄は大きな声で、

「残念、僕は水泳部に入るつもりですから」と、言っている。

「オヤオヤ、大分興奮しているな」と思った。

学校が始まって二、三日して、

「お母さん、僕ね、まだ興奮しているらしくてね、学校でふざけるものだから、皆が僕のこと、ひょうきん者、ひょうきん者っていうんだよ」

知らない友だちが多いので、転校したときみたいな気持ち」と

いっていたが、よく新しい友だちを学校帰りに連れて来る。

「お母さん、お母さん、ちょっと出て来てよ」おやつをつくつていて、手が粉だらけなのに、けたたましく叫ぶので出てみると、新しい友だちを連れて来る。

また、二、三日して、家の前で声がする。

「寄って行けよ。朝からガマンしてるんだろ」「いいよ、いいよ」

「誰もいないっていったら、お母さんだけだよ」

「いいよ、いいよ」

「体に毒だよ」「いいよ、いいよ」

新しい友だちは帰ってしまったらしく、T雄だけが残念そうな顔をして入って来た。

緊張と興奮は毎日の生活にも現われている。朝、ピッタリ六時に起きる。

弟がこの四月、幼稚園に入り、入園式に園長先生が、「六時にバツと起きるをしておさんぽをしてからお食事をしましょう」と、お話しになった。

そのバツと起きるで、兄弟三人そろって起きるようになった。

妹と、弟は近所を一周してくるが、T雄はうでたてふせ数回、英語を三十分ほど、本を少し読んで、身のまわりの仕度、と真剣にやっている。食事もすんで七時四十分まで、椅子にもたれてホ

ヤツとしている。夜八時半には寝ているのだから睡眠が足りない

わけではない。「朝からずいぶん張りきっているから、もうくたびれちゃったんでしよう」「ウン」

テレビも見なくなった。

子ども用のテレビは、T雄の机の上に置いてあるが、英会話をみるだけである。

今まで、「どみ、たく、ぼく」と順番があつて、三日に一度順番がまわつて来ていて、ゆずつたの、ゆずらないのとケンカをしていたが、いつのまにか「ぼく」はぬけたらしい。

◇不安

勉強に対しては何の不安も持っていない。

上級生に対して、非常な不安を持っている。それは、小学校六年のときの二つのことからである。

その一

ある日、友だちと二人で、家の近所の空地を掘っていた。虫でもみつけるような小さい穴である。すると、中学生が、そこを掘じくつたらダメだといったので、やめて帰りしなにその家の前をフツフツ二人で言いながら歩いていたら、その中学生が家の中から急にとび出してきて追いかけてきた。二人でけんめいに逃げた

ら、ちようど水がまいてあり、その中学生はころんでしまった。

次の日、

登校するための集合場所にいると、わざわざその中学生がやって来て、「ヤイ、きのうは、おめえらのためにころんでスポンがビリビリにやぶけちゃったじゃねえか」といって、友だちは往復ビンタ。T雄は、お腹に一突きくらってしまった。

その二

六年生の五人ほどで、放課後、ハードルを並べて練習していた。中学生が二人、フラッと校庭に入って来てわざとハードルを倒した。そのまま行こうとする中学生に、伸ちゃんが、

「そのたおしたのをおこしてください。」といったら、それから中学生がからみ始めた。ああいえば、こういうで、言葉尻をとらえてはいや味をいい、全然話にならない。

結局、伸ちゃんにあやまれといい、伸ちゃんは土下座してあやまった。

家に帰ってその話をしたとき、母に、「相手は二人でしょ。あなたたちは五人いたら、伸ちゃんだけあやまらせないで、何とかしたらいいじゃないの。よく伸ちゃんがあやまっているのを見ていられたわね」といわれた。

T雄にしてみれば、近くの中学生が、小さい子をなぐって死の寸前までいかせた事件があったし、その場はおさまっても、後で、一人ずつ歩いているところを、中学生が仲間をよんで来て、

「お前はなまいきだつてな」などと言つて、なぐるのを知っているのてこわかつたのだろう。

母には、「上級生がわからないことをいったら皆でとびかかつて行け」といわれるし、上級生はこわいし苦しいことであろう。

毎朝出かけるとき、「上級生が無理いったら、困るなあ、話してわかる人たじゃないからなあ、でも、ころされることはないよね。骨が折れたつて、死ななけりやだいじょうぶだよね」と、自分にいきかせるともなく、母にいつているでもなくいつては出かけて行く。

◇クラスの中で

同級生の中では、楽しいらしく、帰つて来ては話をしてくれる。
・男の子でくだらないことをいって人を笑わせている子がいてね、僕は人を笑わせるのが趣味だ、つていつてるの。だけど女の子たちが笑いながら、あの人、バカじゃない、つていつているから、その子に、

「ほんとうにおかしくて笑っている笑いと、軽蔑して笑っている

笑いがあるよ」といったら、

「僕は軽蔑されても笑ってもらった方がいい」と、涙いっぱいめて僕にいったよ。

・きょうは弁当持ってこなけりやいけない日なのに、持ってこないで、人の食べてるのをジロジロみる女の子がいるんだ。

・日本語を知らない奴がいてさ、いじらしい目、っていうんだよ。いじらしいってのは可愛らしいって感じが含まれるでしょう。どうみても可愛らしい感じはないんだな。いじぎたないという感じなのに。

◇クラブ活動

正式に新入生の入部受けつけの始まらない前に、小学校時代の水泳部の人といっしょに、水泳部に入った。

P・T・Aの総会の帰り、母はT雄のようすを見に行ってみた。

広い広い運動場で、皆運動していた。小学校の校庭が広いと思っていたが、もつともつと広く、びっくりした。

プールに行くとき、プール清掃をしていた。プールサイドで、ユニホームをきたまま、しゃがんだり、コースの綱で、縄とびのマネをしたりして遊んでいるのが、三年生だと思った。

水泳パンツになって水の中に入っではいるけれど、真中へんで

バケツで遊んでいるのが、きつと二年生だろうと思う。

プールの中をデッキブラシでいっしょうけんめいこすって働いている。これが一年生だろうと思うと、その中にT雄がいた。

黙って金網のところで見ていると、一年生は皆顔見知りなので、挨拶してくれる。どの子も自分の子のように親しい。

やがて、部長さんにご挨拶をしてしばらくまた金網のところで見てから帰って来た。

帰ってT雄の話に、

「先輩がね、お母さんが、金網のところにいたら、肩くんで、浜田ア、お前のお母さんか」ってやさしくきくんだよ。それで、お母さんが帰ったら、急にやめて、浜田、甘えるんじゃない

い」っていうの」やがて、先輩のしごきが始まった。

クラブでは上級生をすべて先輩とよぶ。

「腕たてふせ」を、十六回、姿勢が悪い、尻があがったといっではやり直しをさせられる。

セットといっでは腕たてふせがセットになっているのを何回もやらせる。

ブリッジという首が太くなるというのを五分間やらせる。その苦しいのを一年生は五分、二年生は二分、三年生はやらない。

いつの場合も、三年生はやらない。しごくだけである。二年生

は一年生のときにつらいのをやってきたので、今年は少しやればいいのだそうである。対象はもっぱら一年生である。

帰って来るとしやがむこともできない。家でも朝晩するようにセット何回、腕たてふせ何回、ブリッジ何分と宿題が出ている。とうていできない。

「お母さん痛くてできないよ」「そう」それでおしまいである。が、先輩の前だと、痛さも感じないで夢中でやってしまうそうである。

「ありがたいことじゃないの。お母さんの前だと痛いからといってやらないけど、そうやってきたえてもらって」

先輩はじょうずにできなければ、何べんでも、その子だけをしごくから、早く終わりたいけれどしつかりやらねばならない。あまりきびしくて男の子なのに、泣いてしまった子もいるそうだ。

「英雄は、この頃、自分だけ余計にしごかれていたような気がする」といい始めた。

なんと、いつか追いかけれ、ころんでズボンがびりびりだと英雄をなぐった人が、三年生の中にいたのである。

「英雄！先輩の気持ちについていって、どんなにつらくてもやる気で運動しなけりやだめよ。いやいややっていたら、首の骨が折れますよ」

母がまたゲキをとばす。

運動部のきびしいのは水泳部に限ったことではない。

陸上部に入った子は、初めての日に広い運動場を六周駆けさせられ、半周をダッシュ四回駆け、家に帰って、足は曲らず、足先に血マメができたくらいだが、先輩が

「きょうは初めてだからこのくらいにしておく」といったそうである。

正式に担任を通してのクラブ入部希望者は、九名あった。

水泳部だから、泳げなくても、泳げるようにしてもらえらうと入ったものもいた。

四月十三日から、水温十三度などという日も泳いだ。水に入ると寒いと、運動場をマラソンして暖かくなるとまた水に入る。

泳げない人をきんぎんしごいて、先輩いわく「これだけしごいてけば、そのうちやめるだろう」英雄はびっくりしてしまった。

「家に帰ったらばくの顔色が悪いからお母さんがびっくりして、やめるようにいった」といってやめた子もいた。

次々とやめていって、今は一年生は男子女子あわせて四名だけとなった。これは小学校からの筋金入りだから、先輩の少々のしごきではやめない。

これから先輩のしごきは佳境に入る。